

ライフ
ストーリー

宮崎 聡子

レインボーフラッグに導かれて
—私にとっての関学レインボーウィーク

私は現在、関西学院大学日本語教育センターで、留学生を対象とした日本語教育に携わっています。今回、寄稿のお声がけをいただき、嬉しく思う一方で「私が書いてよいのだろうか」という葛藤がありました。「アライとはなにか」を模索している者として、関学レインボーウィークとの出会いを起点に、今日までの経験を振り返ってみたいと思います。

1. 関学レインボーウィークとの出会い

私が関学レインボーウィークに初めて出会ったのは、本学の教員となる前の、まだコロナ禍で緊急事態宣言が出されていた頃でした。初めて関学を訪れた際、正門で目にしたのは、「Borderless Colors 2020 関学レインボーウィーク オンライン開催中！」と書かれた大きな立て看板と、その横にはためく縦型のレインボーフラッグでした。さらに進むと、中央芝生を囲むようにいくつもの虹色のフラッグが風に揺れていました。人影のないキャンパスでしたが、当時の不安で覆われた空気を一瞬で変えるような明るい光景に驚き、しばらくそれを眺めていたことを覚えています。そこには確かに、垣根なく人を迎え入れる場をつくり出そうとしている人々の存在が感じられたのでした。

その翌年、本学に着任してすぐにレインボーウィークがあり、私は期待とともに、オンライン開催の講演会や映画上映会、そして数少ない対面イベントであったランバス礼拝堂での「性の多様性を祝う集い」にも足を運びました。その帰り道に、教員のスタッフと思しきお二人に、初対面のご挨拶もそこそこに「来年は実行委員会に加わりたいです」とお伝えしていました。そのお二人が、人間福祉学部の武田丈先生、澤田有希子先生でした。今振り返ると、勢いのままお声をかけた背景には、前任地・長崎での経験がありました。

2. 長崎で知ったフラッグの意味——市民映画祭とヒューマンライブラリー

レインボーフラッグが象徴する意味を知ったのは、2016年に長崎で出会った「ながさき・愛の映画祭」という市民映画祭がきっかけでした。こ

の映画祭は、「誰もが安心して暮らせる街づくり」をテーマに、セクシュアリティを含めたさまざまな人権に関わるテーマを扱った国内外の作品を上映しています。ユニークなのは、映画に関心のある人はもちろん、学生、社会人、当事者団体、支援者など多様な立場のメンバーが実行委員となり、いくつもの企画を用意して、映画の世界を参加者の日常へとつなげている点でした。その企画のひとつに「ヒューマンライブラリー」（人生を貸し出す図書館）がありました。それは、普段話す機会のない多様な背景を持つ人の語りを、本を借りるように聴くことができるというデンマーク発祥の対話型のイベントです。私はそこで、性的マイノリティの方、外国ルーツの方、障がいのある方など当事者の方の語りを聞き、自分の持つ先入観と向き合わされると同時に、さまざまな問題が社会や周囲（マジョリティ）のあり方に根差していることが、切実に伝わってくるのを感じました。その映画祭とヒューマンライブラリーに強く心を動かされた私は、一観客からボランティアスタッフとして参加するようになりました。

関学の正門で見たレインボーフラッグが、単なる印象的な風景ではなく、「誰かの安心を支えようとする意思」に見えたのは、そのような長崎での経験があったからだと思います。

3. 映画を届けること、言葉に向き合うこと

実行委員会に入った私は、まず映画上映会の担当に手を挙げました。長崎での経験が生かせれば、少しは役に立てるかもしれないと思ったからです。これまで、「愛と法」、「片袖の魚」、「最も危険な年」の上映のため、配給会社や監督の方々と直接やりとりをし、上映会やトークイベントの準備を行いました。実行委員メンバーで選び抜いた作品を、作り手の思いを損なうことなく、できるだけ多くの学内の方々に届けるための「つなぎ役」を担うことには、大きなやりがいがありました。「片袖の魚」の東海林毅監督は、上映会翌年には人権問題講演会にもご登壇くださり、その後、「ながさき・愛の映画祭」での上映・トークでも再会することができました。

準備の過程では、一人では答えの出ない局面にもしばしば出会います。2023年、「最も危険な年」（Vlada Knowlton 監督、2018年）の上映会で司

会を担当することになった時のことです。この作品は、2016年にアメリカで起きたトランスジェンダーの人々のトイレ使用をめぐる社会的分断を背景に、子どもの命と未来を守るために闘った親たちの姿を描いたドキュメンタリーです。私は上映前の作品紹介で、「トランスジェンダー」という言葉の説明を一言加えようと、手近な本で調べた内容をもとに「心の性と身体の性が一致しない人」とメモしていました。しかし、その説明でよいか不安があったため、いつも助言をくださる実行委員の大学院生の方に相談しました。するとその方は、その表現は適切ではないとし、「出生時に割り当てられた性別では生きられない人」という表現を提案してくださいました。あわせて、高井ゆと里氏の解説を参照するとよいことも教えてくださいました。この時、私は自分の理解の甘さを思い知ると同時に、誰のために、どのような言葉を選ぶのかを考えることの重要性に気づかされました。

その翌年、2024年の社会学部の公開研究会で、「トランスジェンダーの現状と未来——知る・聴く・考える」と題された高井ゆと里氏の講演を聞く機会に恵まれました。高井氏は講演の最後に、会場全体に向けて、その場に必ずいるであろう当事者の学生へ、「よく頑張って生きてきたね。ここに来てくれてありがとう。会えてうれしい。」と優しく声をかけられました。その言葉を聞きながら、自分は何ができるのかを改めて問われていると感じました。

4. レインボーのネクストラップが支えてくれるもの

関学では、教職員を対象とした「SOGI 研修」が年に数回開催されており、私もそれを受講し、教職員証などを入れることができるネクストラップをいただきました。鮮やかなレインボーカラーに「KWANSEI GAKUIN」の白抜きの文字が映える、素敵なデザインです。しかもこのデザインを手がけたのが直接知っている大学院生の方だったと知り、一層大切に思え、毎日身に付けるようになりました。透明なカードケースに入っている小さな修了証の裏面には、「守るべきこと」として次の三か条が記されています。

1. ジェンダーやセクシュアリティについて決めつけない
2. 一般化せず個々人のあり方を尊重する
3. 個人情報を守りアウティングしない

日々の授業で、同僚間の会話で、日常生活で、私はこれらを本当に守れているだろうか。自分の持つ偏見、無意識のマイクロアグレッション。それらとどう向き合い変わっていきけるか。ストラップは、「わずかでも誰かの安心につながってほしい」という願いとともに、日々のふるまいを振り返るための大切なよりどころになってくれています。

5. 「アライ」とは何か——迷いとともに歩く

「SOGI」「クィア」「ノンバイナリー」「アライ」… これらの言葉を私が知ったのは、レインボーウィークに関わるようになってからです。正直に言えば、いまなお自分のことばとして説明することができません。その不甲斐なさを感じる一方で、レインボーウィークに携わっていると、自然に、これまでは足を運んでいなかった分野の学会や講演会、クィア映画祭などのイベントにも行ってみようようになりました。また関学では学内でも、社会学部や人間福祉学部の公開授業や、人権教育研究室主催の企画など、人権に関するテーマが学べる機会が多く、そうした場が身近にあることのありがたさを感じています。

「アライ」とは何か。文献などで「アライ」の条件に関する記述を読み、そうありたい対象として認識しつつも、「アライ像」を演じてどこかで自己満足に陥ってしまう危うさが自身にはあります。『LGBTQ+ 卒業生たちのライフストーリー集 vol.2』の「当事者の座談会：学生生活とLGBT」（80-89頁）には、「きらきらアライ」という言葉が登場します。そこでは、『LGBTを理解している私はえらい』と思っている人はいや。それがきらきらアライ。」「アライということの名乗らない、知らないけど自分を受け入れてくれる、そういう人がいい」という声が紹介されていました。「アライ」という言葉を考えるとき、この声を忘れずにいたいと思っています。

6. 最後に——私がレインボーウィークに関わる理由

以上のような経験を通して、私が関学レインボーウィークに関わる理由のひとつは、実践の中で無知な自分と向き合い、学ぶことができるからだと思っています。レインボーウィークを通して新しく知ることがらや、向き合う課題からは、留学生対象の日本語の授業を行う上でも、多くの示唆が得られます。

語学の授業では、自己紹介や趣味や休日といった私生活の話題が会話練習等で扱われるため、時に本人が望まない自己開示を強いる恐れがあります。また、教師が学習者を外見や名前で判断し、人称代名詞や呼称を当てはめてしまうということも、残念ながら現実には起こることがあります。日本語においても、一人称や文末表現に現れる性差は、学習者のアイデンティティと直結する言語的な事象でもあります。どの言語の授業であっても、語学教師は、自身の何気ない発言や、用いるひとつの例文が、誰かを排除したり不安にさせたりしていないかに敏感でなければなりません。実行委員会での経験を日々の教育の場にも活かし、安心して学べる授業を提供していきたいと思っています。

そして、もうひとつ理由があります。私は日本語教育センターの所属であるため、普段は学部の学生さんと触れ合う機会がほとんどありません。準備期間から開催期間にかけての時間は、関学生の皆さんと直接話し、考え、学べる、私にとって貴重で楽しい時間になっているのです。その中で、学生の皆さんの思いを形にし、メッセージを学内外に発信していくために、伴走したいという思いがあります。こうした機会をいただけること、必要な場面で頼ってくださること、そして学内でのひとつの居場所を与えてくださっていることに、心から感謝しています。

本当は、レインボーウィークのような取り組みが「必要なくなる」のが望ましい——そのようなことも聞いたことがあります。けれども、現実はまだまだそうではありません。もし、本書を手にとって興味を持ってくださった方がいらしたら、ぜひ、何らかの形でレインボーウィークに関わっていただけたらうれしいです。

レインボーフラッグに導かれて出会ったこの場で、少しでも「誰もが自

分らしく過ごせるキャンパス」に近づけるよう、これからも迷いながら学び続け、自分にできることを見つけていきたいと思います。

参考資料

関西学院大学人権教育研究室（2024）『LGBTQ+ 卒業生たちのライフストーリー集 vol.2』